

川崎
三式戦闘機「飛燕」
1型

童友社 1/100スケールプラスチックキット
製作・文：政府開発援助

1. 飛燕について

陸軍三式戦闘機「飛燕」の試作は昭和15年に発注されている。当時の単座戦闘機は軽快な運動性に重きを置いた「軽戦」と火力や速力を重視した「重戦」とに分けられていたが、川崎航空機の土井武夫試作部長はその区分にはこだわらず優れた戦闘機を開発することに心血を注いだ。その結果完成した機体（開発番号キ-61）は速度・上昇率・旋回性能全ての点において競作機（キ-60）を上回り、当時のドイツ軍主力戦闘機メッサーシュミットBf109をも凌ぐものであった。キ-61は直ちに制式採用され、「飛燕」の愛称が与えられた。「飛燕」は機体が頑丈で急降下性能に優れ多くの戦果をあげたが、戦争中期以降は整備上の問題から液冷エンジンであるハ-40（ドイツ製エンジンDB 601の国産型）及び後継のハ-140のトラブルに多く見舞われることとなった。

2. キットについて

キットには1型の表記が有り、翼内機銃の砲身がモールドされていないところから1型乙を再現したものと思われます。かつてのマルサン製キットに有った主脚等の可動ギミックは失われていますが、表面の繊細な凹モールドは開発年代の古さを感じさせない仕上がりがります。童友社の塗装済キット「翼コレクション」シリーズでは第1弾・第12弾・第16弾の3シリーズで通算12種類の塗装パターン（うちシークレット2種類）が発売されています（但しブラインドボックス販売の為機種は選べない）。この塗装は大変細かく丁寧に塗り分けられています。なお、「翼コレクション」開始にあたってキャノピーが研磨されて凸モールドが無くなり、ピトー管が省略されています。

3. 製作と塗装について

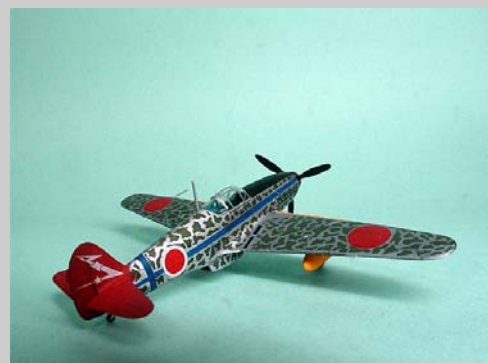
今回製作したのは飛行第244戦隊小林照彦隊長機で、シリーズ第1弾に含まれる胴体に青線の入る方（少佐時代に搭乗）です。既に施されているマダラ迷彩の塗装を極力活かし、加工した部分を中心に基本的にクレオスのラッカー系カラーを筆塗りしています。ちなみに

機体上面緑→130番濃緑色（川崎系）
機体下面銀→8番シルバー
味方識別色→58番黄橙色
プロペラ→131番赤褐色
垂直尾翼赤→3番赤
機体青帯→65番インディーブルー
内装等→タミヤエナメルを調合した青竹色
防眩塗装→タミヤエナメルのつや消し黒

等を使用しました。コクピットが素抜けなので、第12弾に付属するアップデートパーツの陸軍機用操縦席を流用。飛燕I型の特徴である、キャノピー内の丸穴の開いた仕切り板？が省略されているので、0.5mmプラ板で追加しています。リタッチ部分を目立たなくする為にやや濃いめのスミを入れ、最後につや消しクリアを吹いてツヤを整えました。



前面



後面